

第2回 教育支援コーディネーター・ミーティング（報告）

「防災」の観点から学校支援を考える

～「地域」と「学校」双方に意義あるコーディネートを目指して～

各地域で活動する教育支援コーディネーターのスキルアップとネットワークづくりのために、研修会「教育支援コーディネーター・ミーティング」を開催しています。

平成24年度第2回の「教育支援コーディネーター・ミーティング」は、「防災」をテーマとして実施しました。

3.11以降、従来の防災訓練などを見直す機運が各地域で見られ、例えば、学校と地域がそれぞれ別々に、ではなく、連携して取り組む事例も見受けられるようになってきました。

そこで、冒頭、話題提供として、学校が取り組む「防災教育」の現状や観点についてお話いただくとともに、後半はテーマ別分科会ごとに事例報告と意見交換を行い、今後の学校支援における防災教育の可能性について考える機会としました。



■開催日時、開催場所

第2回：10月30日（火） 14時～17時 於：東京都教職員研修センター

■対象

教育支援コーディネーター（学校支援コーディネーター、地域コーディネーター）
（区市町村）学校支援地域本部事業担当者 等

■参加者

港区（1）、文京区（2）、墨田区（1）、大田区（10）、世田谷区（1）、杉並区（5）、北区（2）、板橋区（5）、葛飾区（1）、江戸川区（5）、八王子市（2）、三鷹市（6）、調布市（2）、町田市（3）、小平市（6）、日野市（2）、多摩市（2）、横浜市（1） 計57人

■プログラム内容

【話題提供】 「学校における防災教育の取組状況と“学校支援”への期待」

矢崎 良明 さん（板橋区立志村第一小学校校長、全国学校安全教育研究会会長）

今回のテーマである「防災」に関して、学校における防災教育の取組として、まず、矢崎先生にお話をいただきました。

○「避難訓練で大切なのは、子供が自分で『落ちてこない、倒れてこない』場所を自分で見つけて、身を寄せて危険を回避すること」

○「地震は365日24時間、いつおこるかわからないのに、学校に職員がいる時間は年間の22%。言い換えれば、年間の78%は学校に職員がいないということを是非知ってほしい、



地域の方へも知らせていただきたい。では、誰が避難所を開設するか？ もちろん職員がいる時は開設の準備をする。しかし、同時に何十人・何百人という子供もいる場合は、避難所運営だけに専念はできない。また、学校に職員がいない時は、地域住民が主体的に避難所の開設に関わらなければならない。」

等、防災教育の観点や、地域に対する期待として、避難所の開設・運営に対する積極的な関与の必要性についてのお話をいただきました。

【分科会】地域コーディネーターによるレポートと意見交換

防災をキーワードに「企業との連携」「小学校」「中学校」の各分科会に分けて取組事例を出しながら、意見交換をする場として設定しました。当初、3分科会を予定していましたが、申込状況等の都合により、「①」と「②」は小学校の事例として合同で実施し、「分科会①&②」と「分科会③」の2会場で実施しました。

◆地域コーディネーターによるレポート

(1)「分科会①、②合同」

事例報告① 企業との連携した防災の取組事例から考える

事例「小学校を拠点とした『水の防災プログラム』づくり」(板橋区)

白鳥円啓さん(板橋区立成増小学校支援地域本部地域コーディネーター)

自分の地区では比較的高台にあるものの、果たして水害の心配は全くないのかどうかという疑問を発端として、企業やNPOなどで専門性の高い方と一緒に何かできないかということで、「ミツカン水の文化センター(水の関係)」「NPO 法人プラス・アーツ(アートの視点での防災教育)」「青年会議所(防災マップの関係)」と連携して、地域をめぐるフィールドワークを行ないながら学んだ事例の紹介をしていただきました。



事例報告② 小学校における防災の取組事例から考える

事例「防災キャンプや町会と連携した防災訓練」(文京区)

水木優香さん(文京区立駒本小学校支援地域本部地域コーディネーター)



○関口台町小学校の事例として、防災宿泊体験の取組紹介から、避難所運営に際しては、「町会、学校やPTA、学校支援地域本部の、もっと現実的な役割分担を考える必要性」や「何も指示されなくても、自ら自分の役割を見つけ、行動する必要性」が述べられました。○駒本小学校の宿泊防災訓練の事例紹介から、「児童が協力し、考える訓練の必要性」や「火災時、児童が自分の力で生き残るために、危機管理能力を向上させる教育の必要性」などが述べられました。

(2)「分科会③」

事例報告③ 中学校における防災の取組事例から考える

事例「七町会・自治会合同防災訓練への中学生参加」(江戸川区)

福島 剛さん(江戸川区立葛西第二中学校学校応援団コーディネーター)

「今年、12年目を迎える「七町会・自治会合同防災訓練」において、数年前から中学生も参加するようにするとともに、内容的にも、がれきの下に埋もれた人をどうやって助け出すかという実践や簡易防災頭巾づくりをするなど、より実地の訓練をするように工夫してきた。また、単に見学するだけでなく、中学生一人ひとりが参画し、実際に自分たちで体験するような形態を意識した。」などの紹介があり、「一時的なものでなく、習性として身に着けていく必要性」が延べられました。

また、参加者の中から、葛飾区における中学校の事例として、「防災教育チャレンジプラン(※)」を活用し、中学生が企画段階から地域の防災担当の方と話し合っただけでなく、実際に防災訓練をしている取組についての話もいただきました。

※「防災教育チャレンジプラン」(参照:「みんなの生涯学習 108号」)

<http://www.syougai.metro.tokyo.jp/image/mishou10808.pdf>



◆グループワーク

各会場ごとにレポートを行なったあと、「分科会①、②」では、「子供たちに身に付けてほしい知識やそのためのアイデアやプロセス」等について話し合いました。

また、「分科会③」では、「防災訓練に中学生を参加させる際にどんな学びを期待するか」等について話し合いました。

分科会①&②



分科会③



◆矢崎先生からのコメント

なお、「分科会①、②」に同席いただいた矢崎先生からは、
○防災学習をどんなかたちで進めていくかについて、最終的には、自分で自分のいのちをまもれること。

○そのためにきちんとした知識をもとにして、身を守れる体制をとるということ。

として、以下のような「学習の三段階」があるとのお話をいただきました。

①基本的な知識

②そういう知識をもとに、災害ってどんなものがおきるのかを調べておくこと

③災害から身を守るにはどうしたらよいかを学ぶこと

これが防災教育の基本的な流れであるとのコメントをいただきました。

■参加者の感想より

以下のような感想が寄せられました。

・大人がまだ理解できていない部分もあるので、情報を正しく収集して、まずは自分が「知識」を増やしたいと思います。

・「落ちてこない」「倒れてこない場所」を自分でみつけて避難する。児童が自分で考えるということは、とても大切なことだとわかりました。

・中学生にとって、どんな防災教育が備わっていればよいのかをとも考えることができ良かったです。

・子供たち自らに考えさせること行動をとること。そのための方法を考えたいと思います。

・他地区の情報はとても参考になり良かった

・自分の地域・学校に何かを伝えて、実際の動きになんとかつなげていきたい。